

氏名	藤田寿伸		
専攻分野の名称	博士（教育学）		
学位記番号	博甲第 394 号		
学位授与年月日	令和 4 年 9 月 2 7 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士		
学位論文名	ブルーノ・ムナーリの「触覚のワークショップ」にみる幼児の能動的な学びにおける触覚の役割と可能性 — 触覚に注目した遊びと造形表現から得られる手がかり —		
論文審査委員	(主査) 教授 小池 研二		
	(副査) 教授 加藤 修	教授 鉄矢 悦朗	
	准教授 小田倉 泉	教授 相田 隆司	
	元教員 首藤 敏元		

学位論文要旨

1. 研究の主題

本研究は、イタリアの芸術家ブルーノ・ムナーリ(Bruno Munari, 1907-1998)の子どものための造形表現教育、特に触覚に注目した教育を主たる研究対象としている。ムナーリの教育は幼児を意味する子どもたち (bambini) のためのものとされており、実際の対象年齢は乳幼児から児童を含むが、本研究は特にムナーリの教育と 0～6 歳の幼児の関係を主対象とする。

ムナーリの教育は本人によって日本でもワークショップが実践されたことがあるが、今日、日本の幼児教育の世界で広く知られているとは言えない。そこでムナーリの教育の内容とねらいを研究し、ムナーリの教育を通じて保育者が創造的な教育実践への視点を広げる手がかりを明らかにすることを本研究の目的である。

芸術教育の視点から幼児教育を眺めたとき、保育における造形表現活動の重要性は古くから認識されているにもかかわらず、その教育的意図を実現するに足る保育の手法研究には未だ検討と発展の余地があると考えられる。そこで本研究は創造性を重視した幼児教育における造形表現活動の可能性を、特にムナーリの触覚に注目した造形表現教育の事例を主たる研究対象に取り上げながら探っていく。

2. 研究の対象と手法

本研究で取り上げるムナーリの造形表現教育は、イタリアにおける創造性を重視した幼児教育の事例の一つである。研究において取り上げる対象は、ムナーリ自身が関わった教育活動、ムナーリの後継者たちによって展開されている教育活動、ムナーリの芸術教育との関連性をもつその他の教育活動の事例などである。よって本研究ではムナーリの教育活動の俯瞰から、特に彼の触覚に注目した造形表現教育手法を第一の研究対象とし、さらにイタリアの芸術運動および教育改革運動について調査することによってムナーリの教育観と芸術観の関係を明らかにしていく。

ムナーリの教育に関する調査は文献調査を中心に行い、ムナーリの教育活動関係者への聞き取り調査によって得られた内容を加えて研究材料とする。

またムナーリの造形表現教育が日本の幼児教育にとっていかなる今日的価値をもつかを確認するため日本におけるムナーリの先行研究について文献調査を行い、さらに国内の幼児教育および乳幼児ワークショップにおける触覚に注目した教育手法に関する実践事例の調査内容を比較の材料として取りあげる。

なお本研究で論じるイタリアの幼児教育とは、主として近現代イタリアで生まれた、幼児の創造性を重視した特色をもつ教育を指している。本研究の対象は近代国家としてのイタリア誕生後、主に 1900 年代以降のイタリアの幼児教育である。

3. 研究の結論

本研究を通じて明らかになったムナーリの教育とは、ワークショップを中心に造形表現を通じた幼児の能動的な学びの環境を作り、体験を通じて生まれる発想を表出する表現方法を伝え、子どもの創造性を尊重し育む実践手法である。

またムナーリの教育がどのようにして生み出されたものかという点については、彼の芸術活動を通じた社会改革の希望を子どもたちに託す意図から生まれ、特に触覚のワークショップのアイデアはイタリア未来派芸術運動におけるマリネッティの影響によるもので、その背景にはモンテッソーリの幼児教育における触覚への注目が間接的に影響を与えた可能性を文献調査によって確認した。

ムナーリの触覚に注目した教育の内容とそのねらい、教育的意味はなにかという問いに対しては、本研究の結論としてムナーリの触覚教育は大人が見落としがちな視覚以外の諸感覚、特に乳幼児にとって大切な触覚に注目し、直接的体験を通じて能動的な学びを創造性の発達へと結びつける手がかりである、という結論に至った。